鏡台

行平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鏡台

【Ｎコード】
Ｎ８５７４Ｈ

【作者名】
行平

【あらすじ】
つけられてる。ストーカー？それともまさか、幽霊？

（前書き）

日常の謎系、パズル・ミステリっぽい変則ミステリ。フェアじゃない叙述トリック。騙されたい方はご一読下さい。

序

寒さがこたえる日だった。

希（のぞみ）と一緒に都内某所まで遊びに来ていた。私はポケットに手を入れ、首をすくめてマフラーにアゴまでうずめながら歩いていたが、白い息を弾ませながら歩く希はなにやら楽しげに見えた。

この寒いのに……。

引きこもってないで、と言われ、半ば無理矢理に外出させられる形となったのだった。

「うう……、寒い……、ってゆうか、希、さ、寒くないの？」

「子どもは風の子！ほらミキ、背中丸めてないで、しゃきっと歩きなって」

「そんなおばさんみたいなことを……」

「誰がおばさんだって？」

「ああ、ごめんごめん」

はは、と笑ったものの、寒さで口がうまく回らない。手もかじかんできた。

「今日はミキの就職……いや、内定祝いなんだから」

祝われるのは嬉しいけど、わざわざ寒い中を引っ張り出されては厭がらせとしか思えない。

「ねえ、どこか店に入ろ……」

「あ！」

「なに希……」

私の問いかけを無視して、希は走った。

「松田さん！元気してた？」

ふと見ると、中年の男性がいた。コートこそ着ているが、やはり寒そうに立ちすくんで、希の姿を見るや、やあ、と笑いかけた。
古びたコートにボサボサの髪型が、やつれた顔を、よりいっそうくたびれさせて見える。
「相変わらずやってんのね？」
私が追いついた時、希が中年男性にそう話しかけてるところだった。
「まあね。今日は遊びにここまで？」
松田という男が私に気づいて言った。私は目だけで会釈した。
「あ、うん。こちら、ミキ」
「どうも……」
頼んでもないのに紹介してくれた。
「あ、そうだ、いいこと思いついた！あの事務所行こ。あたし疲れたし休みたいのよね。ちょうど良かった！どうせ松田さんも暇でしょ」
ひどい言われようだ。
希の『いいこと思いついた』は大抵ろくなことじゃない。
「ええ……？ちょっと希！」
この松田さんが何をしている人か知らないが、希はいつも人を振り回す子であるので、さすがに迷惑じゃないか、と引き止めようとした。
「え……おれも暇なわけじゃ……、ああ、ちょっと待って」
松田さんは腕時計を見た。
「ねえ、それ癖なの？」
希は目ざとくそれを見ていた。それから、松田さんは自分のことを「私」じゃなく「おれ」って言うのね、本性あらわした、とも言っていた。
松田さんは、
「おれに飯、奢らせる気だろ？」
笑いながら言った。

的を射ていた。
ちょうどお昼時だったのだ。

私は、そういえば朝から食パン一枚しか食べてなかったな、と思い出したら、急にお腹がすいてきた。
お腹が、ぐう、と鳴った。
このタイミングで……。
心の中で舌打ちをした。
恥ずかしいったらない。
黙って俯いていると、希が言った。
「決まりだね」
目ざといだけじゃなく、耳も良いようだ。

私と希は松田さんに、近くのデパートのレストラン街で奢ってもらい、そのまま『事務所』へ行くことになった。

デパートで温まった体も、また冷え冷えした外気に晒されて歩くことになり、またマフラーをぐるぐる巻いて歩いていた。
しばらく歩いていくとマンションに着いた。ここよ、と希が言った。

「久しぶりに来たけど、相変わらずボロいわねえ」
希は遠慮のないところを言う。
「ねえ希……」
私は小声で言った。
「何してる人なのよ？」
どう見ても事務所というよりは、マンションの一室だった。不審

に思った。松田の風貌からして、何をしている人かも分からないのだから。
その時、すっ、と名刺を差し出したのは松田だった。
《心の友の会　会長　松田俊介》
にこり、と松田は笑った。
営業用スマイルだ。
それを見て、ますます不信感が募った。
「おじゃましま～す」
「ちょ、ちょっと希……」
つられるようにして、室内へ入った。
これが、私と松田さんとの出会いだった。

起

就職先も決まり、色々と落ち着いたころに、ふと思いついたように事務所へ行くことにした。
あれから事務所にはよく行っていて、松田さんとも仲良くなったのだった。
かなり警戒していたのだが、その活動内容はともかく、人となりを知るにつれ、怪しい人という印象はなくなっていた。
だが、

「松田さんさ、もうちょっと部屋、きれいにしたら？」
事務所に着くなり私は言った。あまりの無精さに呆れてしまう。
本やら何やらでごったがえした事務所室内を見回した。来客があるとは信じ難いほど雑然とした部屋だった。

「あ？　ああ……、これで結構、過ごしやすいんだがね、おれは」
ボサボサの頭を掻きながら答えた。
「ほら、必要な物がすぐ手に届く」
言って、どこからか立方体の箱を取り出した。必要な物には見えない。
「なにそれ？　……もう、そういうガラクタばかりとっておくから散らかるんじゃない」
「はは、ガラクタとはひどいな。これは貯金箱」
「貯金箱って……、使ってないじゃない」
見ると、空だった。
「いや、使ってるよ。ほら」
振ると、じゃらじゃらと音がした。
「え！？」
どう見ても何も入ってない、私が見てる一面だけ透明なプラスチックか何かで出来ているただの空箱だった。
どうなってるの？
「ちょっと見せて！　……あっ！」
そういえば、こういうの見たことある、と思い出した。
「これ、鏡になってるんでしょ、ここの部分」
側面から見て、対角線を指でなぞりながら言った。
立方体の正面から見るとまるで空箱のように見えるように、側面から四十五度の角度で中に鏡がある。
鏡に対称に映っていて、不自然に見えないような模様も描かれている。
「子どもじゃないんだから……」

私が言うと、
「こういうのが好きなんだよねえ……、あとこれとか」
松田さんは次に、私の正面にある、妙な四つ足の台に行き、向こう側に身を隠すようにした。
あっ、と小さく声をあげて驚いた。
生首、に見えた。
四つ足の台に頭を乗せている。台の下には胴体が無い。松田は笑いながら、
「びっくりした？」
どうなってるのか、考えていたら、よいしょ、と腰をあげながら松田はさらに続けた。
「ほら」
よく見ると、また鏡だった。私から見て、正面から左にも右にも、四つ足の足元には鏡があった。
そういえば、そのあたりだけ妙に片付いている。
この部屋はいったいどうなっているのか。
「もう……、昨日のテレビでやってた本怖（『本当にあったか疑わしい上に怖いかどうかも微妙な話』という番組名の略称）、思い出しちゃった……季節外れよ。怖い話とかやめてよって感じ」
怖いのは苦手なくせに、見てしまうのだ。私は幽霊は、絶対にいないとは思っていない。ただ私は見たという経験がない。霊感がないのだろう。それでも怖いものは怖い。
「ああ、それで今日は」
松田さんがやっと案件を思い出したように言った。
「怖い思いをしたとかっていう相談しに来たんだっけ？」
最近つけられてる、そう話していたのだった。
「バイトから帰る時間帯って最近もう暗くて」
うん、と松田さんは頷いた。
「でも……相手は帰宅時間を知ってるってこと？」
「ストーカーの事情なんて知りませんよ」

私に訊かれても。
誰なのかも、心あたりがない。
「幽霊かな？」
いたずらっぽく笑いながら松田さんは言う。
「……、冗談でもやめてください！」
「はは、悪い悪い」
悪いと思ってなさそうだ。こちらの反応が可笑しくてたまらないというふうでさえある。
「あ、お茶でも」
「いや、気なんか使わなくて大丈夫で……」
「……入れようと思ったら、ちょうど切らしてた。あはは」
この部屋は、必要じゃない物しかないようだ。
するとそこへ、ピンポン、と玄関のチャイムが鳴った。
こんなところへも来客があるのか、と驚いた。
「ああ、来たな」
と松田さん。玄関に向かい、扉を開けたらしいガチャリという音がした。
「や、悪いね」
「いえ、どうせ暇だから」
「ささ、入って」
ふと見ると、同い年くらいだろうか、男の子だった。
「はじめまして、高山です」
「あ……、希です」
軽く会釈した。
「じゃあさ高山君、彼女を帰りに送ってってよ」
私は我が耳を疑った。えっ、と声をあげる間もなく、松田さんは、
「そういうことだから」
安心して、と言った。
ボディーガードだよ、とも。　唖然とした。
知りもしない人で、しかも今日など初対面だ、そんな得体の知れ

ない人と一緒に帰れというのか。

松田さんが普通じゃないのは見た目から明白だから以前から知っていたが、これには参った。

困惑と軽蔑の混じった目で睨んだが、一向に気にする様子はない。

「あのこれ」

高山君とやらが、ビニール袋を差し出した。

「お茶ってどれがいいか分からなくて」

狭山茶だ。埼玉県名産じゃないか。

「うん、どれでもいいんだけどさ、ありがと」

買い出しまで頼んでたとは。

「どれでもいいってことは、な……」

「今、お茶入れるから二人とも、そこ座って待っててよ。高山君も寒い中、ご苦労様」

私の発言は流された。

「はい、じゃあ遠慮なく」

高山君とやらは本当に遠慮しないで、ぺたりと床に座った。はあ、と、手に息を吹きかけている。かじかんだのだろう。

ごったがえして、必要じゃない物しかない部屋だが、かろうじてコタツはあったので、高山君は足を入れて暖まっていた。

「あのう……」

黙っているのも居心地悪いので話しかけることにした。

「高校生……ですか？」

「うん、高三」

「ああ、同い年ですね」

「僕、早生まれなんでまだ誕生日来てないんだけどね」
そこまで厳密なことは……、と思ったが、はた、と思い、
「あ、私も早生まれなんですよ」
ということで、会話の糸口が掴めて安心した。それとなく談話していると、

「はい、お茶」
松田さんはコタツの上に湯呑みを置くなり、真っ先に自分が飲んだ。
「あ、あつっ」
「そりゃ熱いですよ」
と私が言うが早いか、
「あつっ」
高山君もすでにお茶をすすっていたようだ。
どうもこの二人は天然なようだ、と私は今更ながら気づいた。

遡

「直哉さ、頼みがあんだけど」
兄からの電話だった。僕はもう夜中だったから無視しようと思ったが、あまりにしつこいので出ることにした。
「何？」
努めて冷たく言い放った。

「松田さんとこで頼まれたことがあんだけど、ちょっと用事があってさ、頼むよ」

兄の用事など、どうせ大したことではない。いつものことだった。兄も僕も、松田さんとは古くからの知り合いで、たまに顔を出すのだ。

「……うん。え？なん……、そんなこと何で僕が」

「な、頼んだ。じゃまた連絡するわ」

プツッ、ツー、ツー、……。

はあ。

断れない僕も僕だな。

松田さんと兄からの『頼みごと』を引き受けることになってしまった。

布団を頭まで被り、眠りについた。

承

「寒いね」

僕が言うと、隣の女の子は、ええ、と頷いた。「わざわざ送ってもらっちゃってすみません……えっと高山君は家はこっちの……？」

「うん、そう、S駅」
ミキさんと僕は電車に乗っていた。ちょうどK駅を通過したころだった。
「あ……、じゃあ近いんだ」
そういえば、と僕は言った。
「誰かにつけられてるとかって言ってたね？」
「は、あいえ、確信はないんです……だけど」
「送ろうか」
ミキさんはみるみる表情が変わった。明らかに警戒心を強めたようだ。
「ああ、いやその、危ないし、うち近いから、さ」
たどたどしくなってしまった。ちょっと唐突すぎたか。
「……、え、ええと」
その時、S駅〜、とアナウンスが流れた。ミキさんは、はっとした。降りる駅だ。
二人で降り、改札を抜け、ミキさんの家へ向かった。
「あの……ありがとうございます、じゃあ、ここで」
「あ、うん」
家の近くまで来たのだろう、遠慮がちに言ったので、僕も努めて冷静に答えた。
「僕もこの近くだから」
何かあったら、と言って、《心の友の会》の名刺の裏に自分の連絡先を書いて渡した。
「あ……はあ……」
なんだこいつは、と言わんばかりの表情でこちらを眺めてくる。
ふうっ、と白い息を吐いて僕は、

「ボディーガードだから」
笑いながら言った。
「じゃあまた」

波

「直哉君って幽霊とか信じる人？」
「は？　何を急に言い出すんです……」　僕は松田さんの事務所にいた。コタツで暖まっていると、松田さんは唐突に切り出してきたのだ。
「ここにさ、鏡があるんだけど」
ガラガラと引き戸を開けた。この部屋の構造はどうなっているんだ。
玄関のドアから入って左側に窓、右側の壁に本棚があった。その本棚をどけて、それから壁にあった引き戸を開けたのだ。
どんでん返しになっていたら、忍者屋敷さながらだった。
鏡には、雑然とした室内が映っていた。
「この鏡はさ、生きている人間しか映らないんだ」
「は」
「直哉君、ちょっとここに立ってみてよ」
松田さんは鏡の隣、僕より向こう側に立って、そう指示した。
「もし直哉君が映らなかったら」
にやり、と笑いながら言った。

「直哉君は幽霊かも」

「ば……馬鹿なことを……」

言わないでください、と言おうとして、口をつぐんだ。

それから、至って冷静に、僕は幽霊なんて信じてないし、もし仮にいたとしても僕は電車の改札の扉だって開いたし、コンビニで買い物だって出来たし、足だってついている。僕は今この瞬間まで普通に生きてきた、現にこうして松田さんと喋っているじゃないか。

それに何より、死ぬような思いをしたことがない。

しいて言えば今、死ぬほど寒いということくらいだ。

それだって寒いのが苦手なだけで、凍死寸前というわけでもない。

というような内容のことを一気に捲し立てるように喋り終えると、松田さんは僕を、

「まあまあ」

と、なだめすかした。

それがさらに悔しく、僕は勢い込んで鏡の前に立った。

「……！？」

映ってない。

そんな馬鹿な……。

愕然とした。

松田さんの顔を見ると、にやにやしている。

「これさあ」

言いながら、松田さんも鏡の前に立ち、その鏡に触れた。

僕は目を疑った。

手が、鏡の向こうへ抜けたのだ。しかも松田さんも鏡に映っていない。

「ふふん、説明しよう」

どこかで聞いたことのある台詞を言い、コホン、と空咳をしてから、松田さんは説明しだした。

これはただ、向こう側に、部屋があるだけなのだ、鏡に映っているかのように、対称になるように全ての物を置いたのだ。面白いんじゃないかと思ってね、改造したんだ、と。

「凄いだろ？」

「なんでこんな……」

くだらないことを、という言葉を慎んで、呆れていた。

松田さんは得意気になっている。

飄々としているが、やっていることはあまりにも馬鹿げている。

何の利益もないことに労力を費やして、人が驚くのを見ては喜んでいるのだ。

物好きも、ここまで来ると悪趣味だ。

何も言えないで立ちすくんでしまった。

茫然自失になったのだと勘違いしたのか、そんな僕の反応を見て、してやったりとばかりに嬉々として笑っている。

この部屋も、松田さんも、どうなっているんだ。

転

僕はまた松田さんの事務所にいた。
「はあ？　なんでそんな手の込んだことを……」
「な、頼むよ」
と松田さん。
「ううん……」
「面白いと思うんだけどなあ」
「でもそこまでする必要ないでしょう？」
「ふう、若者よ。青春しないと」
「これが青春ですか」
「ほら、ええと、アルバイトだと思って。ねえ直哉君」
「給料出るんですか」
「ああっと、じゃあこれあげるから。貯金箱」
「……、いや、空だし」
「じゃあこれ」
また松田さんはガラクタの山をあさり始める。どうせろくな物はないと知っているので僕はそれを制した。
「いや、いいですいいです」
それを貰うなら何も貰わないほうがましだ。
「そうか」
松田さんは少し残念そうに言う。
「じゃあ……僕はこれで」

帰ります、という旨を伝えて、立ち上がった。

緩

私はあれから毎日のように、付き人付きでバイトから家まで帰っていた。

さすがに悪いと思い、帰り道の途中、

「あの……、高山君」

「なに？」

「もう、大丈夫だから……ほら、誰もいないし」

後ろを振り返りながら

「気のせいだったんだよ、私の」

と言った。

高山君も振り返って、あたりを見回した。薄暗く、視界が悪い。

「あ、ああ」　と高山君。

「まあ、そうだけど心配じゃないか、ほら最近ニュースでやってるあれがさ」

拉致監禁事件が多発している、というニュースのことだった。私も実を言うと、それが怖かった。まさか、とは思うが、万が一ということもあり得る。

その話をされて、やはり不安になった。

ただ後ろを歩いているだけの人も、車も、全て疑わしいように思えてならなかった。

「あ、そういえばテレビ見た？本怖だっけ」

話題を変えようとしたのだろう。
「見た見た、あの……」
思い出して、さらに怖くなった。
「ああっ、ああいうの苦手？」
ごめん、と高山君は言ったが、怖がってる人間をさらに怖がらせる話題を振るとは、天然を通り越して、もはや、わざとしか思えない。
「う、うん……」
あたりの暗さも手伝って、私は完全に怯えきってしまった。
よりいっそう寒さが増した気がして、身震いした。

急

「松田さん」　直哉君が話しかけてきた。おれの事務所に来るなり、だ。
「まあ、お茶でも」
「あ、ありがとうございます……、って、じゃなくて」
「はは、まあまあ」
「どうするんですか、今日」
「うん、そろそろ行こうか」
おれは時計を見た。
「行こうかって……、部屋、もうちょっとなんとかしたらどうです

か……客を呼ぶ時くらい」
「客だなんて今さら、赤の他人じゃあるまいし」
ははは、と笑ってなだめすかした。
「松田さんって普段何してるんですか？暇なんですか」
「暇なのは直哉君もだろ」
「ちょ……まあ、そうですけど」
「じゃ、さ、直哉君も手伝ってくれるよね」
直哉君は、全くもう、とだけ呟いて立ち上がった。

そろそろだな、と、おれは腕時計を見た。

外は薄暗い。

「ああっと、万全を期して」
「そんなガラクタの山の中の何か持っていくんですか」
「まるで必要な物なんか何一つないみたいな言い種だな、はは」
まあ、実際そうだけど、と呟きながら、探した。
「あった、あった」

「呆れました……そんなものまで」
と直哉君が言ったが、気にせず、促した。

「さあ若いの、いざ行かん」

結

私は松田さんに相談してからというもの、バイトが終わると毎日連絡していた。
「じゃあ、今日は……ええ。はい」
例によって付き人と帰る。

帰宅途中、ふと、また不安になった。
つけられてるかも。
「ねえ……高山君」
「ん？」
「後ろの車……」
だいぶスピードが遅い。
まるで、こちらの歩調に合わせているかのようだ。
「つけてきてないかな……」
どんな車種なのか、ライトが眩しくてよく見えない。
「うん……、どうだろ」
高山君も、やや不安げだった。ふと思いついたように、
「あの車、まこうか」
と言われ、私は、
「どうやって？」
と訊いた。
高山君は、立ち止まって車が通り過ぎるか確認するんだよ。尾行されてることに気づいてますよ、という警告にもなる。そしたら向こうも、むやみなことは出来ないはずだ、と答えた。
「うん……」
一応は、納得したけど、つまりそれは、私たちの目の前まで車が来るのを待つということだ。
それはそれで怖い。

考えていると高山君は、ぴたっと止まった。私も歩くのをやめ、後ろも振り向かず、じっとしていた。

道端でただじっとしているのも不自然だし……でも、と考えあぐね、おろおろしてしまった。

徐々に車が近づいてくる。

私はもう俯いて、じっとこらえるので精一杯だった。高山君のほうも見れないので、彼がどんな表情をしているか分からない。体の向きから考えて、車のほうを、じっと伺っているのだろう。

ライトに照らされた。

車がすぐそこまで来た。

ガーッともゴオーッともつかない音が聞こえた。

バンのドアが引かれた音だ、と気づいた時、私は、口をふさがれ、腕を掴まれた。

抵抗し、もがいた。

しかし、身動きがとれない。

いやっ！と心の中で叫んだ。

口にあたってるものはハンカチのような感触だった。

これはまさか。

思ったが、悲鳴をあげようとして、思い切り息を吸ってしまった。

高山君は……？

ああ、二人とも車に乗せられちゃったのね……。

気づいたが、すでに遅かった。

意識が遠のいた。

解

事務所にて。

・・

三人は、驚いていた。

言葉が何も出ない。

松田さんが開口一番、

「びっくりした？」

と言ったが、誰も何も答えられなかった。

「どうせやるなら徹底的にと思ってね、だから三人とも驚かせたかったんだ。サプライズだよ」　得意満面の松田さんであったが、僕は少し腹が立ってきた。

「僕まで騙すとは……」

「まあ高山君、そう怖い顔しないで」

「すっかりやられましたよ」

と直哉。

「直哉君にはだいぶ手伝ってもらったから、バレるかなあと内心、焦ってたよ、おれはほら、小心者だからさ」

「小心者がクロロホルムまで使いますか！　用意周到じゃないですか！　私、本当に怖かったんですから……」

とミキさんは言った。怒り心頭といった感じだ。

僕とミキさんは、バンに乗せられた後、気がついたら、事務所に来ていたのだ。

ミキさんをつけていたのは、他でもない松田さんだった。あの車を運転してたのも。今日この日のために帰り道を確認すべく、尾行していた。

そして……

「まさか直哉までグルだったとはな」

僕は、弟を見て行った。

「兄さんが最初に松田さんを手伝えって言ったんじゃないですか」

と直哉。

「お前ん家のほうが近いからいいじゃねえか。この近所だろ」

「まあ……、兄さんはここからは遠いですからね。僕もそう思ったから承諾しましたが……でもまさかこれほどとは思いませんでした

よ。ほとんど犯罪ですよ、ストーカーとか拉致とか」
「拉致っていえば、お前ちょっと力強すぎだよ……、いてて」
「兄さんが弱すぎなんですよ……ヘタレだし」
「ヘタレって何だよ」

「ちょ、ちょっと、兄弟喧嘩やめ！まあ、どのみち三人はおれに騙される運命にあったってことだよ」

それにしても、とミキさんは呟いた。
「高山君とこちらの直哉君は……あ、どうもはじめまして」
「はい、はじめまして」
「二人は兄弟なんですか」
騙されやすいことも似ているが、服装や髪型さえ揃えたら、全く同じだった。

「双子なんだ」
なぜか松田さんが答えた。

「しかし兄さんと違って僕は乱暴な口のききかたをしません」
「乱暴にもなるだろ。騙されたんだぜ……、途中まで計画を聞いてたとはいえ」
僕がまず松田さんから話を聞いた。それから直哉に伝えた。その後、事務所で三人で話し合った。
僕がミキさんを送る、そして直哉は他の手伝いをする、そういう段取りだった。
その計画を聞いた日、直哉を残して僕だけ先に帰ったのだ。
拉致計画したのは、あの時か、と思い至った。
「まあまあまあ。おれの顔に免じて、ここはひとつ」
お前のせいじゃないか。
「それであの、この部屋は模様替えしたんですか？　この派手な飾

り付けは一体……？　それから……、こないだまでと家具の配置が逆……まるで」
ミキさんがそこまで言った時、僕は、はっ、として、
「鏡に映したみたいだ」
と言葉を継いだ。
「そうか、そういうことですか」
直哉は得心したようだ。
すると、玄関から向かって左側にある本棚をどけた。
引き戸があらわれ、それを引くと、もうひとつ、部屋があらわれた。

あの、いつもの事務所だ。
この部屋は、いつもの事務所の、隣の部屋だった。

「だから僕が松田さんと部屋を出た時と全く違うんですね。あの時すでに、こちら側の部屋は用意し終えていた。僕が松田さんと二人でいたのは、あちら側、つまりいつもの事務所だった。そして二人を拉致するため僕と松田さんは車で尾行した。二人を車に乗せて、ここへ着いた時、二人はまだ意識朦朧としていた。二人を連れてくるのにやっとだった僕は、玄関の扉を松田さんに開けてもらった。僕らは松田さんに導かれるまま、こちらの部屋の扉から入った……」
直哉はそこまで一息に言うと、はあ、とため息をついた。
どこまでこの人は暇なんだ。そう言いたそうだ。

そんなことは意に介さず松田さんは、
「ねえね、ここを挟んでさ、二人立ってみてよ」
と言って僕と直哉とを引っ張って、部屋と部屋の向こうとこっちに立たせた。
「鏡みたい……といっても今は、ちょっと違うけど」
松田さんは少し残念そうだ。きっとまたいつか、やらせる気だろ

う。
向こう側に立っている直哉と、こちら側に立っている僕とで、顔を見合わせた。
確かに、顔だけみれば、鏡を見ているようだ、と、妙な感慨に耽ってたが、ふと気になったことがあった。
「そういえば僕が立ってるこっち側の部屋は、ずいぶん派手に飾ってあるんだけどさ……何これ？」

「まだ気がつかないんですか」
「え？　クリスマスじゃねえよな……」

僕が言うと、直哉は見下したように見返してきた。
仮にも兄だぞ数秒だけど、と言おうとしたが、はた、と思い留まった。
松田さんが、にやにやしながら、口を開いた。

「高山兄弟とミキさん」
いったん言葉を切った。
「誕生日おめでとう」

「それでこんな手の込んだサプライズを……？」
言ったのはミキさんだ。
しかし、だ。
「もう正月だって越してるってのに、ツリーはねえよ」
クリスマスツリーは年中無休で部屋に置かれているが、普段はほこりまみれだった。
色んな飾りとともに綿が飾ってあったが、もしやほこりじゃあるまいな、と疑うほどだった。

ツリー以外も部屋中に電飾がほどこされ、ピカピカ、チカチカと光っている。目映いばかりのイルミネーションだ。
これは、いくらなんでも……、
「悪趣味ですね」
直哉はついに声に出して言った。

「さ、さ、今日は三人とも主役だから」
松田さんにすすめられ、僕ら三人は座った。
「じゃ、ケーキ切るよ」
いつの間にかケーキがコタツの上に置かれていた。
「私やりますよ」
とミキさん。
「え、そう？　悪いね、じゃあ」
主役にやらせるのか。
松田さんは、すっくと立ち上がった。
戻ってくるなり、
「はい、お茶」
ケーキにお茶かよ、と言うか言わないうちに、松田さんは自分が一番先に飲んだ。

「あつっ」
と聞こえた。
直哉もお茶を飲んで、熱くて思わず声をあげたようだった。
僕はふうふうと息を吹きかけながら、似てない双子だが、猫舌なところは同じなんだな、と思った。

ケーキを切るところで、ミキさんが手を止めた。
「ロウソク吹き消すのやってないじゃない……、ねえ松田さん、ロ

ウソクはあるでしょう？」
「ああ、そういえば」
まさかあのガラクタの中じゃ、と思って心配したら、どこからともなくロウソクを出してきた。
「なんでも手元にあって便利だろ？」
いいから早く、と僕は目で訴えた。
ミキさんはロウソクに火をつけた。
直哉は電気を消した。
松田さんは、
「ハッピーバースデートゥー……」
と歌い出した。
他の三人も、合唱せんとばかりに歌おうとした矢先、
「……ゆふうーっ」
松田さんが火を吹き消してしまった。
あっ、と三人の声が揃った。「びっくりした？」
ふうっ、僕は、ため息をついた。
悪趣味だ。本日の主役、全員が思ったはずだ。

……。

それでも、僕らはここへ来る。こうやってたまに集まっては、ガラクタを見たり、騙されたりしている。

……。

こんなことは、《心の友の会》にいる上では、日常茶飯事なんだよ。

どう？　楽しそうだろう？　君も、この会に入ればいい。

なあ、若者。青春しなくちゃ。

え？　ああ、そうだね、このアンケート用紙は古いやつなんだ、うん、住所とか書かなくていいし……。

あっ怪しくないし、全然、うん怪しくないから。

ナンパじゃないって……、

え、今？

遊べる遊べる、うん全然、暇だし。

ちょっ、ごめん、電話するわ。

……直哉さ、頼みがあんだけど……松田さんとこで頼まれたことがあんだけど、ちょっと用事があってさ、頼むよ。

了

（後書き）

よく分からない感じが残ってるでしょうか。読者様の洞察力を玄人レベルと考えて筆者からの挑戦状と捉えていただいても、筆者が未熟なだけと捉えていただいても構いません。

読了、お疲れ様でした。

ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8574h/

鏡台

2010年11月4日01時48分発行